

残留農薬のスマート・リスクコミュニケーション

The Smart Risk Communication Concerning Residual Pesticides

○大瀧直子*, 山口治子**, 山崎毅*

Naoko OHTAKI-SHIMAUCHI, Haruko YAMAGUCHI, Takeshi YAMASAKI

Key Words: risk communication, risk perception bias, residual pesticides

1. 緒言

我々は、これまで、食品のリスクについて、消費者の不安に寄り添った丁寧な説明を行うことで、確証バイアスの低減、およびリスク認知バイアスの改善を促す試みを実施してきた。山崎ら(2018, 2020)は本学会において、食品添加物やゲノム編集食品に対する消費者の不安に共感する設問をベースとしたスマート・リスクコミュニケーション(SRC)をインターネット調査により実施し、リスク認知バイアスの補正を認めた(添加物: 79人/100人、ゲノム編集食品: 66人/100人)ことを報告した。

残留農薬は主要な食品由来のハザードであるが、リスクアナリシスの枠組みの下、食品安全委員会、厚生労働省、農林水産省、環境省が連携して厳格なリスク評価、リスク管理がなされている。残留農薬のリスクは非常に小さいにも関わらず、いまだに消費者は残留農薬を不安に感じ、リスク認知バイアスが生じていると考えられる。本研究では、残留農薬に関して上述の SRC 手法の効果を検証するため、インターネット調査研究を行った。具体的には、消費者が残留農薬を不安に思うと考えられる理由を提示し、それに対する専門家の知見をわかりやすい文章で説明した。次に、説明文を読み、説明文の内容が理解できたか、不安に感じていたことがどのように変化したかを解析した。

2. 方法

インターネット上に登録された全国のモニターのうち、30~49歳の女性で、料理を週1回以上する、買い物の際に食品表示をチェックすると回答した消費者の中から、「農薬を使用して栽培された野菜や果物はできれば食べたくない」と回答した100人を抽出して、本調査を実施した。

残留農薬を不安に思うと考えられる以下の9項目を挙げ、不安に思う理由を調査した(複数回答

可)。①将来想定外の毒性が現れる不安、②無農薬が安全、③ゼロリスク志向、④環境や持続可能性への影響、⑤農家に対する監視の不備、⑥農家自家用品の農薬不使用への誤解、⑦輸入品の全検査不徹底、⑧オーガニック志向、⑨食品の裏情報に関する書籍、記事。

次に、これらの個々の項目について、専門家の科学的な知見を平易な言葉で説明した短文を作り、それを読んで理解できたか、さらにその理解によって、農薬を使用して栽培された野菜や果物を安心して食べられそうか、選択の際の判断がどう変化したかについて調査した。

3. 結果および結語

消費者が残留農薬について不安に思う要因として挙げた項目のうち、②64%、①59%の順に多く、⑧4%、⑨9%の順に少なかった。説明文の理解は②70%、①62%の順に多く、全体として43%~70%に分布した。選択の判断に対する肯定的な回答(安心して食べられそう)は各項目で23%~48%に分布し、それらを総和すると83%に達した(「すべての説明が納得できない」という否定的な回答は17%)。

本研究から、残留農薬のリスクに関しても、科学的知見の理解により、消費者の認識に改善が見られること、消費者の不安に寄り添った丁寧な説明がリスク認知バイアスの解消に役立つことが示唆された。食品添加物、ゲノム編集食品、および、残留農薬に対する SRC 手法の検証により、今後の食品安全のリスクコミュニケーションに有効に活用できる可能性が示された。

参考文献

山崎毅, 大瀧直子, 富岡伸一, 広田鉄磨, 山口治子 (2018) 日本リスク研究学会第 31 回年次大会 Vol.31, Nov.9-11.
山崎毅, 佐々義子, 山口治子 (2020) 日本リスク研究学会第 33 回年次大会 Vol.33, Nov.21-22, p46.

* 特定非営利活動法人食の安全と安心を科学する会 (SFSS), ** 愛知大学